

「へエ宜ろしおます。やツ。うんとしよウ。(唄早踊り 〓思ひぞ出づる 壇の浦の、その船戦——) へエ着きました、危なふおまつせ。」

船では益々大亂痴氣。

「ア、こらく、どつこい〜。(チャンチャンチキ〜ドロツクドン) ア痛たたたたツ。コラ誰奴や向ふ脛に喰ひ付きやがるのは。」

「フワー。痛い。誰や俺いの顔搔きむしりよるーツ。」

ヒヨいと顔を見ると女房が物凄しい形相して居ます。ピクツとはした物の他の手前もあり、酒の勢ひもあるので鳥渡良え處見せる意りで

「こら、こんな處へ何しに來やがつたんや。去にやがれツ。」

ドーンと一つ胸を突きましたんやが、何しろ氣が逆上つて居る物やさかい足元がお留守や。ヒヨロ〜とするなり河の中へドブーンと嵌りましたが、幸ひ河が浅いので立つと水は腰ぎりしか御座りまへん元結が切れて髪は散亂、白地の浴衣はビシヨ濡れに成つて顔は眞蒼、上手から手頃な竹が流れて來たのを拾ふなり、河の眞ん中へスツクと佇つて……(メ太鼓、頭)

「そも〜我れは桓武天皇九代の後胤平の知盛亡靈なり——。」

「オイ清やん、内の嗅氣狂ひに成りよつたで、ちよねやん、緋扱帯チヨツと貸してんか。」

緋扱帯の輪にした奴を珠數の代りにして、

「其時喜六は少しも騒がず、珠數サラ〜と押し揉んで、東方に降三世、南方に軍陀利夜又明王、西方には大威徳夜又明王、北方に金剛夜又明王、中央には大日大聖不動明王。」

「ウワー、何うだすもし、あの船の喧嘩、豪い派手な喧嘩やおまへんか。」

「いや、あれを喧嘩と見たるのには可哀想だつせ。あら二〇加だすがナ、女は仲居で男が 幫間や、夫婦喧嘩と見せて辨慶と知盛の祈りだすがナ、斯ういふのを褒めたらな可きまへんで。」

「ア、左様か、よう〜今日の秀逸々々、河の中の知盛さんも佳えけれど、船の中の、ベーンけはん辨慶はん」

「何吐しやがね。今日は辨慶や無い、三分の割前ぢやい。」

お
て
が
る
腰
掛

瓦斯ビル西横

大原女茶屋